



ペーター・マリー氏デザインの木製ボウル器

ヨーロッパ材のウォールナットと道産タモ材の融合と配色が美しい木製ボウル器。一見何の変哲もないように見える器に隠されていた秘密は、国内指折りともいえる集成材の高い接着成形加工技術です。職人魂を注ぎ込んで開発した技術は、木の流し台シンク、木の浴槽をも商品化実現しました。追い求めてきた高い技術と獨創性へのこだわりは、これからの新たな美しい作品を生み出すのでしょうか？この感性は、やがて「まちデザイン」にも新たな息吹を運んでくれるかも知れません。



みずたに まつじ  
水谷 松治さん (株)インテリアナス代表取締役/11区 ☎82-2585

【プロフィール】  
旭川市出身。64歳。旭川市立光陽中卒。旭川職業訓練校で木工を学び、当時旭川市内にあった田中成形合板樹で23年間家具職人。倒産後、当時先輩だった故那須孝市氏の旧那須家具工芸(有)に転社。那須氏の不慮の事故で2代目を継ぎました。インテリアナスは、特注家具製造を中心に売上高約1億4000万円(2007年度)。中小企業庁の「JAPANブランド育成支援事業」として旭川家具ブランド確立推進事業(4年目)、今年10月、経済産業省「地域資源活用プログラム」事業の認定を受けています(5カ年、道内16社)。旭川家具ブランドづくりのためにアドバイザー、ドイツ人デザイナー、ペーター・マリー氏デザインの作品化を進め、昨年6月に集成材の木製ボウルを完成しました。来年のドイツ・ケルン国際家具見本市(ケルン・メッセ、1月14日から20日)に出展予定。続く2月には国内展示会で木製浴槽の第2号作品を発表予定です。

「木には木裏、木表というのがあって、縦横、裏表交互に積層すると、ひずみ、ねじれをかわすことが出来る。それをあえてやったんです」。

産地がまったく違う2種類の材料通常、木工・家具職人は性質のまったく違う素材を合わせることを嫌うのだそうです。

「木というのは、単板の場合ねじれたり反ったりする。木の成長が違うので収縮率が違う。だから接着剤で付けてもはがれてくるんです」。

ペーター・マリー氏デザインの作品化。ドイツ人職人が嫌がって決して作品化しなかった器だそうです。そのきっかけは、6年前最初に作ったタモ材を使った集成材盆皿の商品見本でした。

まるで一枚板のように木目が美しい3・6寸の板材が無造作に置かれています。これも6年前に開発した接合部のない積層集成材。

横浜市内の大手デパート10階レストラン街に無造作に置かれているベンチ6台は、この技術を生かした作品です。そばの緑の植え込みには水を与えるので、表面は耐水塗料で耐水性を高めています。技術は既にこ

の時完成していたのです。

◇ 「今は旭川ブランドとしてヨーロッパに家具を出そうと頑張っています。そのあと水回りの家具、そして最後に自分の作品を何点か残せたら良い」。

これぞ水谷デザイン。とうならせる作品作りに密かに腕ぶっています。

平均年齢41歳。13人の社員の中には、大阪、神戸、京都から来た職人も。7年前の技能五輪日本チャンピオンで世界大会に出場した腕前の社員は、神奈川県出身。みな水谷さんを慕って集まりました。後を継ぐ世代も確実に育っています。

「若い連中は、もつと山の中に入って自然の中で仕事をしたいと言っていますよ。小・中学生が夏休み、冬休みにちよつと工場に来て、もの作りの体験出来るような場所も持てたら、と思うし。そういう体験はずつと記憶に残りますから、物を作りたければまた戻ってくるでしょうし」。若い世代へとクラフトマ魂をつなげる新たな夢を広げていきます。

一枚板のような木目が美しいベンチ (横浜そごう10階のレストラン街)



来年2月にペーター・マリーデザインの第2号作品を発表予定の木製浴槽現行製品



今年6月に完成した木製流し台シンク



水谷さんの3歳の孫がアイデアを出した商品「くつべら」



関西大学から特注の礼拝堂用長椅子を急ピッチで製造中の工場



事務所棟